若手シンポジウムの実践から〈総合〉を考える 一問いの共有と総合人間学史の構築一 Considering "Synthesis" from the Practice of Young Researcher Symposium: Sharing questions and Constructing the history of Synthetic Anthropology

大倉 茂

OHKURA, Shigeru

1. はじめに

本論文は、総合人間学会第 11 回大会「総合人間学会創立 10 周年記念フォーラム」において、「総合人間学における〈総合〉とはなにか」、あるいは「〈総合〉はいかにして可能か」という問いをめぐって議論する上での報告をまとめたものである。全体の報告は、ほかの論文(穴見 2016、上柿 2016、長谷場 2016)によってなされていることから、本論文では、当日の私の報告をもとに質疑応答やその後の考察を含めて論じることとする。

私に課せられたテーマは、過去 4 年若手シンポジウムをとりまとめた経験から、若手シンポジウムにおける実践から〈総合〉について迫るということであった。ここで若手シンポジウムならびに、若手委員会について若干の説明を加えておきたい。若手シンポジウムとは、若手委員会がとりまとめる若手研究者によるシンポジウムである。若手委員会は、2016 年第 11 回研究大会において若手部会から委員会化された総合人間学会における組織であり、若手研究者の研究活動の活性化、若手研究者の発掘が

目指されている。以下で論ずる内容は、若手委員会ではなく若手部会当時の活動内容ではあるが、混乱を避けるため現行の若手委員会という名称を使用することとしたい。そういった若手委員会によってとりまとめられた若手シンポジウムにおいて、若手研究者が〈総合〉に向けて奮闘してきた軌跡を残しておくことも重要であろうと考える。

後にもう少し詳しく論じるが、端的に言ってしまえば、私は〈総合〉はそうやすやすとできないと考えている。そうはいっても、私は総合人間学会の設立集会以前の総合人間研究会にも参加したことがあり、長く総合人間学会に関わっているひとりである。したがって、〈総合〉に期待しているひとりである。したがって、本論文では、難しいながらも果敢に〈総合〉に取り組んでいる若手シンポジウムの現在を記録として残しておきたいと考える。そういった奮闘の蓄積が、〈総合〉にとっては最も大切なのかもしれないとも考えている。

以下,第一に私なりに学問の歴史と〈総合〉の関係を大きく踏まえた上で,第二に若手シンポジウム

をはじめる上で考えたことを述べる。そして第三に 現状の若手シンポジウムの抱える問題を描くことで、 〈総合〉のあるひとつの難しさをあぶりだしたい。 そして、最後に、上柿によって提案された、〈総 合〉を可能にする中間理論と比較検討することで、 いかに〈総合〉を可能にするかという問いに対する 私なりの回答を論じることとする。

2. 学問の歴史と〈総合〉

学問の歴史は、学問の細分化の歴史と言い換える ことも可能である。学問が, 人文科学(人文学 humanities を「科学」と称してしまうことにため らいはあるが)、社会科学、自然科学と大別され、 まさに諸学の共通項が〈科〉学として浮かび上がる, あるいは浮かび上がってしまうことからも明らかで あろう。そのようななかで、総合人間学会が取り組 む〈総合〉という目論見は学問の歴史という視点か ら考えれば大胆不敵である。哲学(philosophy)に よる神話からの決別が学問の歴史の始点、あるいは 原点だとするならば、そのなかで対抗する小さな動 きをはらみながらも、2500年にわたる学問の歴史 にある学問の細分化という大きな流れに対抗しよう というのである。決して大げさな表現ではなく、と んでもない所業である。したがって、なにか簡単な 方法論を振りかざし、〈総合〉が可能かのように見 せる言説からの決別から議論を出発する必要がある だろう。それが、〈総合〉はそうやすやすとできな いと冒頭で言及した理由である。2500年の学問の 歴史の大きな流れに対抗することは並大抵のことで はない。

しかし、諸学の共通項が〈科〉学として浮かび上 がってしまう現状のなかで、〈総合〉という営みの

大胆不敵さが前景に出ず、しかるべき取り組みであ ると思われる向きもある。たとえば環境問題に対し て、学際的な取り組みが必要であるということは広 く受け入れられていることだろう。〈総合〉が"とん でもない所業"とは捉えられず、受け入れられる背 景には、〈総合〉を学問に求める社会的機運がある ことは間違いない。したがって、学問が現実の社会 からの乖離を許す営みでないとするならば、社会的 機運の要請に応えることで、2500年の学問の歴史 の大きな流れに対抗する〈総合〉に関する言説を構 築していかなければならない。ここで強調しておき たいのは、総合人間学を成立させるためという学問 論としての文脈だけで〈総合〉を語るのではなく、 どういった社会的機運の要請があるのか注視し、あ くまで社会との共同の視点から〈総合〉を語るべき であるということである。どういった社会的な問題 を解決するために〈総合〉が必要なのかといった視 点抜きにして、〈総合〉を論ずることは空虚な議論 に終わってしまうのではないだろうか。特に総合人 間学会は、そういった社会的機運の流れのなかで、 人間という概念をめぐる〈総合〉のあり方を地に足 をつけて議論しなければならないだろう。

しかし、やはり「人間とはなにか」という問いに 直截に接近するのは難しい。したがって、たとえば 環境問題などといった具体的な問いに迂回しながら、 「人間とはなにか」という問題に接近することが重 要である。キーワードの共有に留まらず、具体的な 〈問いの共有〉によって、研究者同士が専門の壁を こえて議論することが可能になる。そして、2500 年の学問の歴史から人間を〈総合〉的に考える上で の背骨を求めなければならないだろう。 『総合人間学研究』第 11 号 2017 年 1 月

3. 若手シンポジウムを準備するにあたって

第8回研究大会から始まった若手シンポジウム を準備するにあたってまず考えたことをシンポジウムの作り方とテーマにわけて述べていきたい⁽¹⁾。

若手シンポジウムを準備するにあたってまず考えたことは、「若手」であることを踏まえてシンポジウムをつくることであった。「若手」がシンポジウムをつくるということは、通常のベテラン研究者が登壇して作り上げるようなシンポジウムとは異なるシンポジウムになるだろうと考えた。ベテラン研究者が登壇して作り上げるシンポジウムは、半ば「完成された」あるいは、「成熟された」議論を共通の基盤として議論することが可能であるが、若手が集

まってシンポジウムを作る場合はそうはいかない。では、「若手」によるシンポジウムは、どのようなシンポジウムの作り方がありうるのだろうか。若手は一般に、第一に研究者として未熟である(1-1)ということ、第二に時間の融通が利く(1-2)ということという二つの特色がこの文脈からは導き出せるであろう。そこで、「総合」人間学会であることから特定の研究分野で固めるべきではないだろうということ、所属やジェンダーのバランスに配慮するべきであろうということなども含めて勘案しながら、以下のように考えた。

- (1-1) 若手は研究者として未熟である。
- (1-2) 若手は時間の融通が利く。
- (2-1) 登壇者のみでシンポジウムをつくる発想を捨てる。
- (2-2) これまで個々の若手研究者は携わったことのない研究に大胆に取り組む。
- (2-3) 若手委員会のメンバーを含めた複数回の勉強会などを通じてシンポジウムをつくる。

図1「若手シンポジウム」の前提

若手は研究者として未熟であることから、司会とパネリストという一部の関係者(以下、登壇者)のみでシンポジウムをつくる発想を捨てる(2-1)こと、未熟だからこそ各ディシプリンの壁を越えにくいことからこれまで個々の若手研究者は携わったことのない研究に大胆に取り組む(2-2)こと⁽²⁾、若手は時間の融通が利きやすいことから、手間暇をかけてシンポジウムをつくること、より具体的には若手委員会のメンバーを含めた複数回の勉強会などを通じてシンポジウムをつくる(2-3)ことを実践し

ようと考えた。

そして次に若手シンポジウムにおいてどのような テーマ設定をすべきだろうかと考えた。繰り返すこ とになるが、登壇者のみが若手シンポジウムを作る のではなく、若手委員会全体として若手シンポジウムを作り上げる発想を重視し、当日はフロアからの 意見を募る時間を大切にし、フロアに座っている全 員が参加できるシンポジウムにする必要があった。 そこでテーマ設定において以下の3点を特に配慮 した。第一に今に向き合うテーマ、第二に総合人間 学としてさまざまな分野からのアプローチが可能なテーマ、第三に総合人間学が主題として問うたことがないテーマである。今と向き合うテーマにし、さまざまな分野からのアプローチが可能なテーマにすることで、若手シンポジウムに参加する全員が当事者性、専門性をもって、議論にあたることができる。そして、若手としてこれまで総合人間学会が主題と扱ったことのないテーマに果敢にチャレンジすることが議論空間としての総合人間学会の裾野を広げることが議論空間としての総合人間学会の特色として今日性、学際性、市民性が挙げられることから、その点も考慮した。

また、上記の点を配慮することによって以下の積極的な2点が結果として可能になった。

第一に、改めて論じることになるが〈問いの共有〉の重層性が可能になった点である。今に向き合う身近なテーマにすることで、若手シンポジウムの登壇者、若手委員会のメンバー、若手シンポジウムのフロアとの〈問いの共有〉を可能にし、そのことによって、学際性の高い小さいグループから議論を始めて、シンポジウムという大きい場にもっていくことで〈問いの共有〉の重層性が生まれ、緩やかな理解から高い理解までさまざまな理解を前提とした参加者に議論への窓口を開くことができた。

第二に総合人間学としてアプローチが可能なテーマのリストアップができた点である。総合人間学会としてそれぞれの専門から「人間とはなにか」という学会のアイデンティティにも関わる大きな問いに接近可能なテーマをリストアップすることを、結果として目指していたと言える。これまで総合人間学会がシンポジウムなどで扱ってきた、たとえば環境問題、生命、戦争、平和などといったテーマに⁽³⁾、

高齢化、子ども、病気などといったテーマも「人間とはなにか」という問いに接近可能なテーマとしてリストアップできたのではないだろうか。

4. 若手シンポジウムが抱える問題

若手シンポジウムは、第1回から概ね狙いの通 り、シンポジウムの参加者がそれぞれの当事者性、 専門性を活かして、活発にご質問、ご発言を頂いて いる⁽⁴⁾。2時間の半分を質疑応答の時間に充ててい ることも功を奏しているようい思われる。しかしな がら、上記のような積極面もありながら、若手シン ポジウムが抱える問題も少なくない。ここで課題と すべき最大の問題点は、登壇者、若手委員会内で議 論してきたことがシンポジウムのみの参加者と必ず しも共有されていない点である。フロアとの応答の 段階では、勉強会や若手委員会内での準備段階で行 っていた議論をシンポジウムでなかなか伝えられな いもどかしさがいつも残ってしまう。その共有不可 能性は、もちろん若手の力量不足、知識不足もある だろうが、すべてが若手の力量不足、知識不足に還 元されるわけではないだろう。

多くの方々から質問を頂くので、テーマとなるキーワードの共有はできていると思われるが、学問的な〈問いの共有〉にまで至っていないのではないか。ここでいう問いとは、論文を書く上での課題設定と言い換えることもでき、問題の背景、概念の諸規定も含んだ問いである。ここでいう問いは、シンポジウムにおいては、趣意文に示されている内容とも言えるだろう。もちろん総合人間学会としてのテーマのリストアップ、そしてテーマの共有は、大切である。それはおそらく上柿の論じる直接的総合に該当するだろう(上柿 2014、上柿 2016)。しかし、そ

れに留まってはならない。上柿の論じる間接的総合 に該当する〈問いの共有〉を皆で目指すことを意識 することで総合につながるのではないだろうか。ま た、〈問いの共有〉は総合の高次化をもたらすよう に考える。

また、若手シンポジウムの第1回から第3回ま では、〈老〉と〈幼〉という共通の課題を論じてお り、第4回では〈病〉という課題について論じて いる。若手シンポジウムや若手委員会のメンバーの 中では、一定の〈問いの共有〉がなされ、第1回 から第4回にかけて、総合の高次化のきざしのよ うなものは見えていたように思われた。若手シンポ ジウムは、メンバーが集まった当初はテーマに関わ る文献を共に読み、問題意識をメンバーの中で共有 しながらラフに話をしていくことで、趣意文に育て ている。その過程がまさに〈問いの共有〉の過程で あると言えよう。その過程を、第1回から続けて いくことで第3回にいたり、第3回は第2回まで の報告論文を共に読んだりすることから作業を始め、 過去の若手シンポジウムとの〈問いの共有〉を目指 した。しかしながら、第3回の若手シンポジウム のふたを開けてみると、フロアからの応答は第1

回以前に戻ったようであった。過去の報告論文は学 会誌に載せ、Web を開けばいつでもその過程に触 れられるという意味では〈問いの共有〉への窓口を 広げ、可能性は拡大したように思われるが、学会を 通じて、特に数年間にわたって、〈問いの共有〉を することの難しさを感じた。たしかに、シンポジウ ムの登壇者、若手委員会においては、メンバーシッ プが明確であったため、〈問いの共有〉が可能とな り、第1回から第4回にかけて、総合の高次化の きざしを見出すことができたのかもしれない。しか し、学会内での議論であってもそれは可能なのでは ないかと考える。これまでの編集委員会や、若手シ ンポジウム登壇者の努力で Web にこれまでの議論 の蓄積はなされている。会員自身がそういった議論 の蓄積を大切にする学会における研究風土作りも大 切なのではないだろうか。したがって、学問的な 〈問いの共有〉までは、学会内でのこれまでの議論 の蓄積に目を向ける学会における研究風土作りも含 めて、時間と手間がかかるので、継続して議論して いくことが重要であると考える。ごくごく当たり前 な結論だが、時間と手間をかけるしかないと思って いる⁽⁵⁾。

第1回若手シンポジウム「〈老い〉を考える―近代化・自立・尊厳」

第2回若手シンポジウム「現代社会における子どもと環境のあり方」

第3回若手シンポジウム「〈老〉と〈幼〉から考える人間の主体性」

第4回若手シンポジウム「〈病〉から考える社会と人間し

図 2「若手シンポジウム」のテーマ

ちなみに、第4回若手シンポジウムは、これま での若手シンポジウムとテーマが違うだけではなく, 理論畑の研究者が大部分を占めていたが,第4回

メンバーの研究手法も大きく異なった。これまでは

はフィールドをもった研究者によってシンポジウムを行うことができた。若手シンポジウムとしては大きなチャレンジであった。その評価は、今後の総合人間学会における議論に委ねたい⁽⁶⁾。

5. 中間理論との接合点と〈総合〉の高次化

本論文で強調する〈問いの共有〉をもう少し掘り下げる意味で、上柿の強調する中間理論との差異を論じておくことは有効であろう⁽⁷⁾。上柿はまず〈総合〉を、専門知を直接的に総合する直接的総合と、間接的総合に分析する。そして、後者によって目指

すべき〈総合〉がなされるという。おそらく本論文で強調している〈問いの共有〉も間接的総合に位置付くだろう(図3を参照のこと)。そういった意味で、〈問いの共有〉と中間理論は、間接的総合のひとつとしてならびたつ関係にあると言える。さらに、中間理論が提唱する「動的な学」としての総合人間学という理念は共有できるだろう。「長期的な『運動』全体の中にこそ実は総合人間学というものの本質があるのだ」(上柿2016)とすることは、〈問いの共有〉においても可能であるように思われる。



図3 中間理論と問いの共有の関係

しかしながら、やはり〈問いの共有〉と中間理論をもつことは異なる。中間理論は、「共通の言語装置」に重きを置くその性格上、抽象性の高さから逃れられず、中間理論を理解している者と理解していない者との壁をつくってしまうことから、中間理論は排他性をはらんでいる。それゆえに、中間理論を持ち込む前に、われわれは人間を〈総合〉的に捉えうる問いを並べ、それを学会として共有し、議論を継続して続けていくことがまずもって求められるように考える。しかしながら、先に述べたように中間理論は理論を共有できぬ者に対して排他的であるが、理論を共有できる者には深い議論が可能であるだろう。ここに中間理論の強みがあるのはたしかである。ここに中間理論の強みがあるのはたしかである。

の議論を追うことで公共的であることができるが、深い議論を進めることは難しいかもしれない⁽⁹⁾。

しかし、総合人間学はそれでいいのではないかとも思う。専門知を備えたものが〈総合〉に挑戦するのであって、深い議論は個々の専門知のなかではたせればよいのではないだろうか。そして、そうして育まれた専門知がまた〈総合〉に還流されていくことで、本来の〈総合〉の高次化が可能になってくるのではないだろうか。

また本来の高次化を支えるには、やはり神話から 学問が離れていって以来の人間の議論の蓄積に耳を 傾けることが当然のことながら求められる。間接的 総合がいかなる総合を目指すのかに関して、依って たてるような背骨が必要である。先に「対抗する小 さな動きをはらみながらも」と述べたが、細分化に 対抗する動きは確かにある。そういった動きを批判 的に検証し、そのことを通じて〈総合〉人間思想の 掘り返しをすることが求められるだろう。

たとえば、アリストテレスとヘーゲルは細分化に対抗する動きの代表であるように考える。一方で、アリストテレスは、アテネの斜陽を背負いながら、古代ギリシアの知をまとめ、〈総合〉したといえる。他方で、ヘーゲルもまた近代知の総括を独特の仕方で行い、まさに〈総合〉を担った先人であったといえよう。

しかし、現代社会において求められる〈総合〉は、アリストテレスやヘーゲルの行った〈総合〉とは重なり合いながらも異なるはずである。したがって、現代社会において求められる、あるいは社会的要請に応えうる〈総合〉と、アリストテレスやヘーゲルの〈総合〉とはどう異なるのか、あるいはどう同じなのかという考察を行っていくべきではなかろうか。言い換えれば、〈総合〉を担う研究者が依ってたてるような総合知の歴史、つまり「〈総合〉人間思想史」を構築すべきであろう。そのことによって、

〈総合〉を高次化していく, 背骨を構築することが できるのではないだろうか。

一朝一夕になされることではないし、現代社会においてアリストテレスやヘーゲルのような仕事がひとりでできるようには思わないが、それこそ時間と議論の蓄積で手間暇かけてゆっくり作り上げられればよいように思う。危機の時代だからこそ地に足のついた議論が総合人間学会でなされることを強く期待したい。

注

- (1)以下,若手シンポジウムに関する記述の主体が便宜上筆者になっているように思われる箇所も多くあるが,あくまで若手委員会(当時若手部会)の議論を経ていることは確認しておきたい。
- (2)意外に思われるかとは思うが、若手シンポジウムをめぐる議論では、若手ほど既存のディシプリンを頑なになってしまう傾向があるように思われる。
 (3)詳細は、上柿(2017)の表1を参考のこと。
 (4)特に〈老〉をめぐるテーマを扱った第1回、第3回は、文献を読んでいるだけではわからない当事者性に満ちたコメントを多く頂いた。
- (5) 〈総合〉をめぐる議論もこれから総合人間学会でなされていくことと思うが、上柿の提案(上柿2014 など)、そしてその後の議論などを踏まえた建設的な議論がなされることを期待している。
- (6)第 4 回若手シンポジウムの報告論文もこれまで 同様に Web 版に掲載される予定である。ぜひご一 読いただければと思う。
- (7)上柿の中間理論については、本論文では最小限の説明に留めるため、上柿の諸論文を直接参考にしていただきたい。
- (8)上柿は、中間理論を複数用意することの重要性を述べており、決してひとつの中間理論のみで〈総合〉が可能であると論じているわけではないことは強調しておきたい。その中間理論の複数性も「動的な学」としての総合人間学の理念におけるエッセンスである。
- (9) 〈問いの共有〉と中間理論の相互補完性についても考え得るだろう。むしろ〈問いの共有〉と中間理論の相互補完はいかに可能かといった論立てを行うことが生産的かもしれないが、十分に考えきれな

いこともあり、今後の課題としたい。

参考文献

穴見愼一(2017)「「学会創立 10 周年記念フォーラム」のための弁明」『総合人間学(電子ジャーナル版)』総合人間学会,第11号第1部

上柿崇英(2014)「『自己家畜化論』から『総合人間学的本性論・文明論』へ」『総合人間学(電子ジャーナル版)』総合人間学会,第8号,pp.142-146

上柿崇英(2017)「総合人間学と「中間理論」の方法論一総合人間学会「創立10周年記念フォーラム」をうけて」『総合人間学(電子ジャーナル版)』総合人間学会,第11号第1部

長谷場健(2017)「総合人間学の方法論試論―「人間の自律」をキーワードとして」『総合人間学(電子ジャーナル版)』総合人間学会,第11号第1部

[おおくら しげる/立教大学(非常勤) /環境人文学]